**平成31年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査における**

**士別市の学力等の分析**

　　　　【令和元年10月21日　士別市教育員会（学校教育課）】

平成31年度（令和元年度）の全国学力・学習状況調査は、平成31(2019）年４月18日が調査実施日であった。士別市教育委員会では、小中学校11校全ての学校で実施した。

このたび、北海道教育委員会から調査結果の概要の提供を受け、今後の学習指導に反映させるため、士別市教育委員会として、次のとおり分析結果をまとめた。

**１　調査の目的**

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取り組みを通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

**２　本調査実施に関する士別市教育委員会の基本的な考え方**

士別市教育委員会は、本調査の目的からその意義を認め、定められた方法に従って、調査を実施した。

(1) 調査は、これまで各学校が、それぞれの計画に基づいて実施している標準学力調査などと同様に、通常の教育活動の一環として実施した。

(2) 調査結果は、学力の特定の一分野であり、本調査により測定できるのは、学校における教育活動の一側面に過ぎないことを踏まえる。そこで、学校の序列化や過度な競争につながらないよう十分配慮し、学校ごとの結果公表は行わないが、士別市の学力傾向を明確化するために、市内全体の数値結果を公表する。

(3) 教育委員会及び学校は、児童生徒の学力・学習状況のそれぞれの課題を把握・検証することにより、適切な教育活動の充実・発展を図る。

**３　調査実施日**

平成31（2019）年４月18日（木）

**４　調査対象**

(1) 小学校　６年生

　(2) 中学校　３年生

**５　調査の内容**

**(1) 教科に関する調査**

① 国語、算数・数学、英語

※本年度の調査から、従来の主に知識に関するＡ調査と主に活用に関するＢ調査を一体的に問う問題に変更し、Ａ・Ｂ区分がなくなった。また、中学校で新たに英語の調査が加わった。

(ｱ) 身に付けておかなければ、後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容

(ｲ) 実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等

② 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のため

　の構想を立て、実践し評価・改善する力等に関わる内容

**(2) 生活習慣や学習環境に関する質問紙調査**

　　 ① 児童生徒に対する調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査

② 学校に対する調査

指導方法に関する取り組みや人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する質問紙調査

**６　本市の参加状況**

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 小学校 | | 中学校 | | 総数 | |
| 学校数  （校） | 児童数  （人） | 学校数  （校） | 生徒数  （人） | 学校数  （校） | 児童生徒数  （人） |
| 国語 | ６ | 141 | ５ | 138 | 11 | 279 |
| 算数・数学 | ６ | 141 | ５ | 138 | 11 | 279 |
| 英語 |  |  | ５ | 137 | ５ | 137 |

**７　教科に関する調査の結果**

平成31年度（令和元年度）調査結果

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 平均  正答率 | 小学校 | | 中学校 | | |
| 国語 | 算数 | 国語 | 数学 | 英語 |
| 全国 | ％ | **63.8** | **66.6** | **72.8** | **59.8** | **56.0** |
| 全道 | ％ | **63** | **64** | **72** | **58** | **54** |
| 士別 | ％ | **64** | **64** | **69** | **52** | **47** |

※文部科学省から提供される平成29年度以降の都道府県及び市町村のデータは、

小数点以下が四捨五入されています。

平成30年度調査結果【参考資料】

|  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
|  | 平均  正答率 | 小学校 | | | | | 中学校 | | | | |
| 国語Ａ | 国語Ｂ | 算数Ａ | 算数Ｂ | 理科 | 国語Ａ | 国語Ｂ | 数学Ａ | 数学Ｂ | 理科 |
| 全国 | ％ | **70.7** | **54.7** | **63.5** | **51.5** | **60.3** | **76.1** | **61.2** | **66.1** | **46.9** | **66.1** |
| 全道 | ％ | **70** | **53** | **62** | **49** | **59** | **77** | **61** | **65** | **46** | **67** |
| 士別 | ％ | **69** | **53** | **62** | **49** | **61** | **78** | **61** | **65** | **47** | **68** |

**８　士別市の学力調査の結果**

**(1) 全体**

市内全体としては、小学校は全道の平均正答率〈以下「全道平均」と表記〉を国語はやや上回り、全国の平均正答率〈以下「全国平均」と表記〉と同程度であった。算数は全道平均と同程度であるが、全国平均を下回った。

中学校は３教科とも全国全道平均を下回る結果であった。

教科別に見ると、前述のように小学校の国語は全国平均と同程度で、算数は全道平均と同程度であり、上昇傾向を示した。

中学校は、昨年度は成績を大きく伸ばし、国語Ａ、理科で全国平均を上回り、数学Ｂは同程度であったが、本年度は全道平均との比較でも、国語が３ポイント、数学が６ポイント、英語が７ポイント下回る結果であった。ここ数年来、全国平均との差を徐々に縮め、上昇傾向を示していたが、本年度は下降傾向を示した。

以下は、小中学校別・教科別に、さらに分析したものである。その内容は、領域別・問題別とも全国全道平均と比較し、結果の傾向と無解答率の状況について、その概要と特筆すべき事項を記述した。

**(2) 小学校**

**①【国語】**

今年度の調査では、全国平均と同程度の結果であった。

領域別では、「話すこと・聞くこと」・「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」で、全国全道平均を上回っているが、「書くこと」「読むこと」では全道平均と同程度であり、全国平均をやや下回った。

問題別では、「漢字を文の中で正しく使う」伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項の問題や「目的に応じて、質問を工夫する」の話す・聞くことの問題について、正答率が高かった。また、「目的や意図に応じ、調べたことを報告する文章を図表やグラフを用いて、自分の考えが伝わるように書くことができるか」の書くことの問題については、正答率が低かった。

無解答率については、全国全道平均と比較して、全問題で低い傾向にあるとともに、評価の観点の一つである「国語への関心・意欲・態度」が全国平均を２ポイント上回った。

**②【算数】**

今年度の調査では、全道平均と同程度で、全国平均を３ポイント下回る結果であった。

領域別では、「数と計算」「量と測量」「数量関係」が全道平均と同程度で、全国平均を３～４ポイント下回り、「図形」は全国平均と同程度である全道平均を３ポイント下回った。

問題別では、「示された減法に関して成り立つ性質を基にした計算の仕方を解釈し、与えられた式の計算に適用する」の数と計算の問題では、全国全道平均を上回った。しかし、「棒グラフから読み取る」数量関係と数と計算の問題・「図形の面積の求め方を解釈し、その求め方の説明を言葉や数を用いて記述する」量と測定の問題・「図形の性質や構成要素に着目し、図形をずらしたり、回したり、裏返したりし、他の図形を構成する」図形の問題については、正答率が低かった。

無解答率については、全国全道平均と比較して、全問題で低い傾向にある。

**(3) 中学校**

**①【国語】**

今年度の調査では、全国平均を４ポイント、全道平均を３ポイント下回る結果であった。

領域別では、「読むこと」が全道平均と同程度で全国平均を２ポイント下回り、「話すこと・聞くこと」が全国平均を３ポイント、「書くこと」が全国平均を８ポイント・「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が全国平均を５ポイント下回った。

問題別では、「文章の展開に即して情報を整理し、内容を捉える」読むことの問題・「話し合いの話題や方向を捉える」話すこと・聞くことの問題で、全国平均をやや上回った問題もあったが、ほとんどの問題で全国全道平均を下回った。中でも、｢伝えたい事柄について、根拠を明確にして書く」記述問題は、全国平均を13ポイント、全道平均を11ポイント下回った。

無解答率については、全国全道平均と比較して高い傾向にある。また、国語への関心・意欲・態度が全国平均と比較し10ポイント低い。

**②【数学】**

今年度の調査では、全国平均を８ポイント、全道平均を６ポイント下回る結果であった。

領域別では、「関数」・「数と式」で全国平均を大きく10～11ポイント下回った。また、「図形」・「資料の活用」は全国平均を５ポイント下回った。

問題別では、「確率を求める」資料活用の問題・「反例の意味を理解しているか」の図形の問題は全国平均を上回っているが、「目的に応じて式を変形したり、その意味を読み取り、事柄が成り立つ理由を説明する」や「６ｎ＋９を３（２ｎ＋３）に変形する理由を完成する」数と式の問題・「資料を整理した表から最頻値を読み取る」資料活用の問題・「反比例の表からＸとＹの関係を式で表すことができる」関数の問題では、正答率が極めて低く、全国平均を17～18ポイント、全道平均を15ポイント下回った。

無解答率については、全国全道平均と比較して全体的に正答率の低い問題ほど、無解答率が高い傾向にあった。

**③【英語】**

今年度の調査では、全国平均を９ポイント、全道平均を７ポイント下回る結果であった。

領域別では、「聞く」・「読む」・「書く」の３領域でマイナスポイントである。（※領域の「話す」は参考値でデータは提供されていない）

特に「書くこと」が13ポイント低かった（全道平均と比較しても10ポイント低い）。

問題別では、「まとまりのある英語を聞いて、話の概要を理解できる」聞く問題のみが、全国平均を若干上回ったが、他のほとんどの問題は全国・全道平均を下回った。特に、「与えられた情報に基づいて、３人称単数現在時制の肯定文を正確に書く」や「一般動詞の１人称複数過去時制の肯定文を正確に書く」の問題は、正答率が極めて低く、全国平均を20ポイント下回った。

しかし、無解答率については、国語・数学と比較して低い傾向にある。

**９　学習状況調査の結果〈児童生徒質問紙〉**

学習状況調査については、毎年文部科学省が比較分析しているが、次に記載する項目については、本市が前年度と同じ質問内容を抜粋して比較してきており、　今年度も同様に、全国全道の結果と比較しながら分析した。また、新たに加わった英語についても分析を加えた。

○ 児童生徒に対する調査として、学習意欲・学習方法・学習環境・生活の諸側面などに関する児童生徒質問

○ 学校に対する調査として、教育活動全般についての取り組みや人的・物的な教育条件の整備の状況に関する小学校、中学校への質問

**(1) 授業時間以外での学習時間など**

**①「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、１日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか」（学習塾の時間も含む）**

「１時間以上学習する」と回答した小学生の割合は48％で、昨年度よりやや高く、中学生は39％で昨年度より15ポイント低くなった。

　士別市内の児童生徒について、最近の経年データを見ると、家庭学習の時間が上昇する傾向を示していたが、本年度は中学生は下降する結果となった。

　さらに、全国平均と比較すると、「１時間以上学習をする」割合は、小学生で19ポイント、中学生は30ポイント低く、いずれも家庭学習の時間が少ない傾向にある。

**②「学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）１日当たりどれくらいの時間、読書をしますか」**

「30分以上」読書をすると回答した小中学生は、小学生で37％、中学生が33％で、全国平均より小学生が３ポイント低く、中学生は６ポイント高かった。

また、読書を「全くしない」割合は、小学生は全国平均より２ポイント高く、中学生は４ポイント高い結果であった。

**③「家で、自分で計画を立てて勉強していますか」**

　　「している」「どちらかといえばしている」と回答した小学生は57％、中学生は42％であった。昨年度は全国平均と同程度であったが、本年度は小学生で15ポイント、中学生で８ポイント、全国平均を下回る結果であった。

**(2) 国語の学習**

**①「国語の勉強は好きですか」「国語の勉強は大切だと思いますか」など、小中とも９項目の学習に関する質問があった。**

小学生は、「国語の勉強は大切だと思いますか」で肯定的な回答が92％で、全国平均と同程度で、「解答を文章で書く問題で、どのように解答しましたか」で、「最後まで解答しようと努力した」と回答したのが84％と全国平均を３ポイント、全道平均を４ポイント上回った。「国語の勉強は好きですか」で肯定的な回答が64％で、全国全道平均と同程度であった。その他６項目についても全国全道平均と大きな差はなかった。

中学生は、「国語の勉強は好きですか」で肯定的な回答が66％で、全国平均を５ポイント上回った。「国語の勉強は大切だと思いますか」で肯定的な回答が88％ではあるが、全国平均を３ポイント下回った。一方「授業で目的に応じて、自分の考えを話したり書いたりしていますか」と「授業で文章や資料を読むとき、目的に応じて必要な語や文を見つけたり、文章や段落どうしの関係を考えながら読んでいますか」が全国平均を８ポイント、全道平均を６ポイント下回った。その他５項目については全国全道平均と大きな差はなかった。

**(3) 算数・数学の学習**

**①「算数・数学の勉強は好きですか」「算数・数学の勉強は大切だと思いますか」など、算数が11項目・数学が５項目の学習に関する質問があった。**

小学生は、どの項目も全国平均と大きな差はなかった。中学生は、「数学の勉強は好きですか」が全道平均を２ポイント上回り、全国平均と同程度であるが、「数学の勉強は大切だと思いますか」など、その他４項目で全国平均を６～９ポイント下回った。

**（4）英語の学習（新設）**

**①「英語の勉強は好きですか」「英語の勉強は大切だと思いますか」など、英語の学習に関する質問が、今年度新たに中学校で14 項目あった。**

「１、２年生のときに受けた授業では、スピーチやプレゼンテーションなど、まとまった内容を英語で発表する活用が行われていたと思いますか」が全国平均を９ポイント上回った。また、「２年生のときに受けた授業では、自分の考えや気持ちなどを英語で書く活動が行われていたと思いますか」が全国平均と同じで全道平均を２ポイント上回った。

しかし、12項目で全国平均を下回る結果であった。

とりわけ、「あなたは将来、積極的に英語を使うような生活をしたり職業に就いたりしたいと思いますか」で、肯定的な回答をした生徒の割合が22％で、全国平均を20ポイント、全道平均を14ポイント、また、「英語の勉強は大切だと思いますか」が70％で全国平均を15ポイント、全道平均を12ポイント下回った。

**(5) 基本的生活習慣**

**①「朝食を毎日食べていますか」**

小学生は95％が朝食を摂っており、全国平均と同程度である。中学生も昨年度を若干下回る91％であるものの、全国平均と同程度であり、概ねしっかりと朝食を摂っている状況が伺える。その一方で、小学生２％、中学生４％とわずかではあるが、朝食を全く摂っていない児童生徒もいるという結果となった。

**(6) 家庭でのコミュニケーション**

**①「家の人と学校での出来事について話をしますか」**

約72％以上の小中学生が肯定的な回答をしているが、昨年度より小中学生とも10ポイント下回る結果であり、全国平均と比較して小学生が３ポイント、中学生は４ポイント低い結果となった。

**(7) 目標意識・規範意識等**

**①「自分には良いところがあると思いますか」「将来の夢や目標をもっていますか」**

自己肯定感や自尊意識に関わる「良いところがあると思うか」については、肯定的な回答が昨年度（小中学生とも80％以上が肯定）よりも小学生が12ポイント、中学生が16ポイント低下し、ともに、全国平均を小学生６ポイント、中学生10ポイント下回った。

また、「将来の夢や目標をもっているか」については、小学生が昨年度より４ポイント低下し80％、中学生は昨年度とほぼ同じ67％であった。全国平均を小学生４ポイント、中学生３ポイント下回った。

**②「学校のきまりを守っていますか」**

肯定的な回答が小学生が全国平均を上回る93％、中学生が全国平均と同じ96％であった。

全体的には、学校のきまりや規則を守る規範意識が高いことが伺える。

**10　学習状況調査の結果〈学校質問紙〉**

学校に対する調査として、教育活動全般についての取り組みや人的・物的な教育条件の整備の状況に関する小学校、中学校への質問である。

**(1) 学習態度**

**①「調査対象学年の児童生徒は、授業中の私語が少なく、落ち着いていると思いますか」**

本年度も小学校は肯定的な回答で、「その通り」や「どちらかというとその通り」を合わせると100％である。小学生の学習態度の良さが伺える。　　　　　　　　　　　　　　　　　　。

一方、中学校では昨年度、全ての学校が「その通り」との回答であったが、本年度は「その通り」が60％（３校）、「どちらかというとそう思う」が20％（１校）、「どちらかというとそう思わない」が20％（１校）であった。

**(2) 国語・算数・数学、英語（新設）の指導方法**

**①「調査対象学年の児童生徒に対して、国語の指導として、前年度までに、補充的な学習の指導を行いましたか」**

小中学校ともに全ての学校で肯定的な回答をしている。全国平均と比較すると、「よく行った」との回答については、小学校で18ポイント、中学校で52ポイント上回った。全ての学校が「よく行った、どちらかといえば行った」と回答している。

**②「調査対象学年の児童生徒に対して、国語の指導として、前年度までに、発展的な学習の指導をしましたか」**

小中学校ともに肯定的な回答をしている学校がほとんどであり、小学校で「よく行った」との回答が、全国平均を８ポイント上回り、また、中学校では、45ポイント上回った。全ての学校が「よく行った、どちらかといえば行った」と回答している。

**③「調査対象学年の児童生徒に対して、算数・数学の指導として、前年度までに、補充的な学習の指導を行いましたか」**

小中学校ともに全ての学校で肯定的な回答をしている、全国平均と比較すると、「よく行った」との回答については、小学校で13ポイント、中学校で19ポイント上回った。

**④「調査対象学年の児童生徒に対して、算数・数学の指導として、前年度までに、発展的な学習の指導をしましたか」**

小中学校ともに肯定的な回答をしている学校がほとんどであり、小学校で「よく行った」との回答が、全国平均を５ポイント上回り、また、中学校では、21ポイント上回った。全ての学校が「よく行った、どちらかといえば行った」と回答している。

**⑤調査対象学年の生徒に対して、英語の指導として、「前年度までに、補充的な学習の指導を行いましたか」「前年度までに、発展的な学習の指導を行いましたか」など、英語の学習に関する質問が、今年度、新たに中学校で13 項目あった。**

「前年度までに、聞いたり読んだりしたことについて、生徒同士で英語で問答したり意見を述べ合ったりする言語活動を行いましたか」・「前年度までに、聞いたり読んだりしたことについて、その内容を英語で書いてまとめたり、自分の考えを英語で書いたりする言語活動を行いましたか」・「前年度までに、原稿などの準備をすることなく（即興で）自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う言語活動を行いましたか」・「前年度までに、発展的な学習の指導を行いましたか」・「前年度までに、英語でスピーチやプレゼンテーションなど、まとまった内容を英語で発表する言語活動を行いましたか」が全国全道平均を大きく上回った。

一方、「年間の授業のうち、どのくらいの頻度でＡＬＴ（外国語指導助手）を活用した授業を行いましたか（週に数回以上）」が全国平均を18ポイント、全道平均を23ポイント下回った。次に「お互いの授業を見て、指導方法や指導内容を学び合うなどの連携を、小学校とどの程度行いましたか（行った・どちらかといえば行った）」が全国平均を８ポイント、全道平均を19ポイント下回る結果である。

**(3) 地域の人材の活用**

**①「保護者や地域の人が学校の美化、登下校の見守り、学習・部活動支援、放課後支援、学校行事の運営などの活動に参加していますか」**

「よく参加している」と回答している小学校は67 ％（４校）で全国平均を２ポイント上回る。中学校は20％（１校）で、全国平均を18ポイント下回った。しかし「参加している」まで含めると、小学校 100 ％（６校）、中学校80 ％（４校）であり、小学校は全国平均を２ポイント上回り、中学校は全国平均を10ポイント、全道平均を６ポイント下回った。今後も、積極的な活用継続が期待される。

**②「地域学校協働本部やコミュニティ・スクールなどの仕組みを生かして、保護者や地域の人との協働による活動を行いましたか」「指導計画の作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を活用しながら効果的に組み合わせていますか」「教育課程の趣旨について、家庭や地域との共有を図る取り組みをおこなっていますか」**

本市においては、以前から地域学校協働本部を設置して取り組み（水泳・スキーなどの学校支援活動）を進めてきている。また、コミュニティ・スクールについては、一部地域ですでに実施している学校もあったが、本年度から市内全体が本格実施となった。

　　「地域学校協働本部やコミュニティ・スクールを生かした保護者や地域の人々との協働による活動」では、「よく行った」「どちらかといえば行った」が小学校で100％で全国平均を21ポイント上回った。中学校は60％（３校）で、全国平均を８ポイント、全道平均を６ポイント下回った。

　　「指導計画作成に当たり、教育活動に必要な人物・物的資源等を、地域等の外部資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせているか」では、「よくしている」「どちらかといえばしている」を合わせると小学校が100％で全国平均よりも高い全道平均を２ポイント上回り、中学校では80％（４校）で全道平均を６ポイント、全国平均を７ポイント下回った。

また、「教育課程の趣旨について、家庭や地域との共有を図る取り組み」では、小学校100％で、長年の取り組みによりその効果を上げてきていることが伺える。

中学校は80％（４校）で、全国平均を６ポイント、全道平均を15ポイント下回った。

**③「調査対象学年の児童生徒に対して、教員が大型提示装置（プロジェクターや電子黒板）等のＩＣＴを活用した授業をどの程度行いましたか」**

大型提示装置の使用頻度は、小学校で「週１回以上使用する｣ は全国平均より30ポイント、全道平均より40ポイント低く、昨年度と同様の結果であった。中学校は100％で全国平均より19ポイント、全道平均より23ポイント高く、昨年度より活用頻度が大きく伸びた。

**11　まとめと課題**

学力向上のために、各学校では様々な教育活動や学習指導の工夫・改善を行っている。小学校の国語は全国平均と同程度であり、算数においては全道平均と同程度で、全国平均との差は３ポイント以内であった。

中学校では、調査した教科が全国全道平均を下回り、ここ数年と比べると下降傾向を示した。とりわけ、英語・数学に課題を残した。

特に英語の「書くこと」、数学の「関数」と「数と式」の苦手分野の克服が急務である。

ただし、異なる視点から見ると、現３年生が平成28年度の小学校６年時の調査結果と比べ、国語は３ポイントほど上昇し、全国平均との差を縮めたとも言える。

以上の結果から、教科では指導方法や学習状況について、今後も継続して、基礎的な知識や技能的な学習内容を定着させるとともに、それらを活用して、課題を解決する力を育成すること。また、小学校と中学校の教職員が、教育内容や教育方法を共有し、学習を協働的に推進することが極めて重要であると考えられる。

次に、学習状況調査における「普段（月～金曜日）の家庭学習の時間」については、小中学生ともに全国全道平均と比較して少ない状況にある。また、小中学生とも「読書は好きだ」が全国平均以上で、読書時間が微増傾向を示すが、その一方で、全く読書をしない児童が21％、生徒が39％もいることから、家庭での読書習慣が確立されていない様子が伺える。

このことから、今後に向けた課題として、家庭学習に取り組む姿勢や時間の増加、家庭との連携を深める方策を強化し、さらに「早寝・早起き・朝ごはん」運動等の推進により、生活習慣の改善を図ることが重要であると考えられる。

**12　今後の対応**

今年度の調査結果について、教育委員会会議で報告・説明し、今後の対応等について協議した。

各学校では、学力の向上をめざして、ＴＴ指導を取り入れた少人数指導や習熟度別指導を継続しており、指導方法や指導体制の工夫改善、あわせて、放課後や長期休業における学習サポートを行ってきた。

平均正答率は小学校は伸びの兆候を示しつつあるものの、まだ中学校で下回っている状況にあることから、各学校でも調査結果の分析を行い、学力向上に向けた課題を明確にしながら、さらなる改善を図る必要がある。こうしたことから、これまでの各学校の取り組みの方向性を再確認し、次のとおり方策を再構築することとした。

(1) 児童生徒の基礎的な知識の習得を確実なものにし、さらにそれらを活用して課題を解決するための思考力、判断力、表現力の育成に向けて、学校改善プラン等で短期・長期的な目標設定を行い、課題解決を図る。

(2) 教師の授業力を向上させ、新学習指導要領の実施に伴い、主体的・対話的で

　深い学びを実現するため、様々な方策による授業づくりに積極的に取り組む。

　①　新学習指導要領に対応するため、教職員を対象とした研修会を行う。

②　小学校３校（士別小、士別南小、剣淵小）の取り組みとして３年目となる、（１，２年目は、士別小、士別南小、士別西小）授業改善推進チーム活用事業の積極的な推進による成果が現れてきているところであり、国語・算数の授業改善をさらに進める。

③　今回の調査結果から、課題である英語に対する意識や学力の向上のため、小中の連携強化を図るなど、小中の系統性を踏まえた指導計画を作成し授業を展開する。

④　ＩＣＴの効果的な活用による「わかる」授業づくりで、学びの質を高める取り組みを推進する。

⑤　授業のはじめに目標を示し（課題設定の明確化）、授業の最後に学習を振り返る活動は、これまで同様、授業づくりのポイントとして心がける。

⑥　思考力を高めるための話し合い活動や、児童生徒に自分の考えを発表させる機会を確実に設けるなど、日常の授業改善を図る。

　(3) 効果的な家庭学習の習慣化に向けて、家庭との連携を一層進める。

(4) 「生活リズムチェックシート」の活用や、各種調査結果を参考に、家庭の協力と理解を得ながら、１日の生活バランスを考えた、望ましい生活習慣や適切な運動習慣の定着について啓発を図る。

(5) コミュニティ・スクール本格導入により、保護者や地域住民の積極的な参画を促し、地域とともにある学校づくりを一層推進する。

このような取り組みを通し、児童生徒に対して目標意識をもたせるとともに、自分自身への自己肯定感を高めていく。また、学校課題を解決するためには、学校と家庭の連携協力が不可欠であることから、今後も各学校の「学校だより・学年だより」「保護者懇談」などを通して、その重要性を保護者に対して説明し、理解を深める取り組みを進める。

さらに、教育委員会が、各学校の協力を得ながら、今後も「土曜子ども文化村」「チャレンジ寺子屋」「チャレンジスクール」などのほか、公民館の家庭教育支援事業などの社会教育事業の充実を図り、生涯学習の観点からの取り組みを一層推進する。